

とくいく「禅語」八

■ 啐啄同時（そっさくどうじ）

曲った木は曲った木として輝く場所があり、真っ直ぐな木は真っ直ぐな木として輝く場所がある。曲った木を真っ直ぐにしようとせず、真っ直ぐな木を曲げようとせず、その木、本来の形を大事にして木を活かす。匠（職人）と木の関係は、師と弟子の関係そのものであること。そんな師と弟子の関係を一言で表した禅語が「啐啄同時」です。

「啐」は、卵の中の雛が「もうすぐ生まれるよ」と内側から殻をつつく音で、「啄」は、そんな卵の変化に気づいた親鳥が、「ここから出て来なさい」と外側から殻をつつく音です。内側から殻をつついて破る者と、それを外側からつつき導く者。そんな両者の「啐」と「啄」が、少しもずれることなくピタリと同時に行われるという師弟関係が、成長しようとする者と導く者との理想を示した禅語です。

そのように成長する者と導く者の関係は、どこにでも存在します。家庭生活での親と子に始まり、学校での教師と生徒、競技スポーツでのコーチと選手、会社での上司と部下、職人の世界、伝統芸能の世界など、ありとあらゆる所で、そういった人間関係（師弟関係）が存在します。それら師と弟子の両者が相対する研鑽、教育、修行の場面が、一般社会、日常生活の中、いたるところで行われています。もちろん、私たちの道場でも同様です。

そういった関係の中で、親鳥（導く者）が、雛（成長しようとする者）が十分に成長する前に外から殻をつついて破ってしまったら、準備が整う前に外界に出てしまい成長を阻害することになりかねません。だからといって、親鳥がいつまでたっても殻をつつくことをしなければ、自分の力で殻を破ることのできない雛は、なかなか外に出ることが出来ません。ですから、親鳥と雛の殻をつつくタイミングがちょうど同じであることがとても大事なことだということです。

道場での稽古指導においても、子どもから大人まで、あらゆる層の道場生を相手に稽古指導を行います。10人いれば10人、20人いれば20人、個々の性格や体力、運動センスや能力などは様々です。成長するタイミングは早い生徒もいればコツコツ時間をかけて伸びてくる生徒もいます。稽古指導しながら、ここをもう少しこうすれば、こういうことを身に付ければ、こういったことを意識すればといった指導をすることでガラッと変化し成長することもよくあります。特に優れたセンスがあるわけでもなく、自分としっかり向き合いながら地道に稽古を重ねている生徒が、ちょっとしたことで変化し成長を感じる事が多々あります。

●成長のタイミングを見極める

年明けの2日、3日に開催された第96回箱根駅伝で2年ぶりに総合優勝を果たしました。当初、青山学院大学の4年生の選手は「史上最弱」「ダメダメ世代」と呼ばれ、

競技面でも、生活面でも、最上級生としての自覚が足りず、「自分（下級生）なら4年生にはついて行きたくないぞ」と厳しい言葉を監督から投げかけられ、原監督も夏までチームがまとまらず頭を抱えていたといます。

3区を走った主将の鈴木君は、当時、優勝にふさわしくないような態度をする部員もいて、本気で一緒にやっけて行く気があるのかを説き、これまで見過ごしてきたことも、これではいけないと思い厳しいこともお互いに言い合い、いっぱい、いっぱいだったとのこと、そういった中でチームを変えるには、自分が変わらなければということに気づき、楽になったといます。自分が頑張ることで良い雰囲気になり、自分が変わることで他の4年生も変わる。4年生が変わればチームが変わると考えで殻を破りました。その後、夏合宿を経てチームは4年生中心に大きく成長し優勝を果たしました。

「啐啄同時」早くもなく、遅くもない「その時」を逃さず、正しく導く熟知に富んだ働きは、親鳥である師が雛である弟子を導くのに、どこでどのようにきっかけを与えるか、その成長のタイミングを決して間違わない、絶妙の機を逃さないことが師（導き者）の大きな役割でもあるのです。